

四季の行

山口誓子

四季吟行

山口誓子

創元社

四季吟行

©昭和五十年五月二十日 第一版第一刷發行

著者 山口誓子
やまぐちせいし

發行者 矢部文治

印刷所 伊藤印刷株式会社

發行所 株式会社 創元社

大阪市北区樺上町四十五

振替口座・大阪五七〇九九

電話・大阪(363)二五三一

東京營業所 東京都新宿区山吹町七十七

電話・東京(269)一〇五一

落丁・乱丁本はおとりかえます

0090-500502-4202

四季吟行

目次

春

伊勢行	一〇
初伊勢	一四
参宮街道	一六
正月の志摩	二〇
志摩の崎々	二四
九十九里浜行	二六
高嶺と高齢	三二
御母衣行	三四
宣長と清白	三六
道	四一
神々の国	五二

御 齋 峠	三
若狭より奈良へ	五
近江路の春	六
多賀の鳥居	六
淀川のこと	七
滝 原 行	三
移りゆく西宮	六
松 江 行	八
足守と利玄	四
小豆島と放哉	七
海	九
高崎山の猿	三
「季節の窓」抄	七
アンコール巡礼	九
仏跡と更紗	一〇四

夏

富士山	110
高い山から	114
八丈島一周	117
蓼科行	123
木曾馬籠	126
安乗	130
矢の川峠	133
役の行者	136
「季節の窓」抄	141
有馬行	145
屋久島	149
種子島	153
ホタルの頃	157
奄美大島行	161

インドにての連想……………一六二

秋

伊吹山……………一六六

神　　島……………一七一

湯の山の宿……………一七四

大台ヶ原行……………一七七

六甲のひぐらし……………一八一

賽郭翁祠碑の石……………一八三

蜻蛉の滝……………一八七

星空をながめて……………一九〇

南紀三輪崎……………一九三

竜安寺……………一九五

甲　　山……………一九九

鳴門の憲吉……………二〇三

新　　涼……………二〇八

小豆島行	二二
高松行	二五
インドのこと	三〇
仏 跡	三五

冬

戸隠行	三三
木曾行	三四〇
能登塩田	三四四
東海の天	三四八
湖 北	三五二
ぶり網	三五五
伊勢行	三六七
伊勢街道	三六一
菰野円空・志摩円空	三六三
大台ヶ原山	三六七

吉野の奥……………	二六九
峠 路……………	二七三
雲霧吟行……………	二七三
火星のことなど……………	二七七
残 虫……………	二八一
奥丹後半島行……………	二八四
鳴門と伊良湖……………	二八八
平戸行……………	二九四
椎葉印象記……………	二九八
更紗のこと……………	三〇一
東南アジアの舞踊……………	三〇七
インド行……………	三一〇
タジ・マハール……………	三二四

あとがき

事

初風
に

島

島

伊
島
湖
岬
七

島

伊 勢 行

恒例によって、年の始めに伊勢神宮に詣でた。賢島のホテルから自動車で来て、宇治橋前の駐車場にそれを置いた。おびたらしい自動車であった。それにも増しておびたらしい人出であった。

宇治橋を渡る。昭和四十四年十一月二日の渡初めのとき渡って、その欄干の擬宝珠に「御裳濯川大橋」と刻んであることを知っている。五十鈴川は御裳濯川とも言っていたのだ。

橋を渡って右へ進む。『伊勢参宮名所図会』の挿絵を見てもわかるように、昔そのあたりは館町たちまちという町で、参道の両側に土産物店が並んでいた。それが明治二十四年に撤去させられ、今日のような、淨らかな神域となったのだ。

五十鈴川べりの芝生に銀杏のような大きな枯木が立っている。同行の西島氏は、その木をメタセコイヤと説明された。その木なら西島氏から分けてもらって、西宮苦楽園の私の家に植え、それが高い木になっている。すこぶる成長の早い木だ。外国産のその木が神苑に立っているとは知らなかった。

おびただしい人々とすれちがい、すれちがいして、神前に到る。外玉垣御門の内に入るを許され大御神に二拝二拍子一拝する。

戻りには、いつものように神楽殿に立ち寄り、応接間で知合いの神官たちに会う。いつものように即吟を請われたので

初詣外つ国の木の鉢立つよ

と記帳した。「外つ国の木」などとよそよそしいが、メタセコイヤのことである。

記帳をめくると、昨年は、

初神楽太く神慮に叶ひたり

という句を記している。

初詣でを終えて、寂照寺へ行った。

猿田彦神社の前を過ぎ、牛谷坂を登って、古市の方へ行く。これが昔ながらの参宮道で、寂照寺は古市中之町の右側にある。いつもその門前を通るが、その寺を訪ねるのは初めてである。

その寺に画僧の月僊が住職をしていたことがある。その月僊のことが知りたく、残っている画が見たくて来たのである。

門を入った右手に、月僊上人之碑が立っている。ぎっしり刻んである漢文は、『神宮名勝誌』に反り点をつけて載せてあるから、私は読んで知っている。

正面に金毘羅社、左手に経堂がある。すでに堂の扉が開かれ、私はその内に招じ入れられた。堂内に輪転式書架があつて、中に一切経がぎっしり詰っている。そしてそれに世義寺せぎじの蔵印が押してある。もと世義寺の蔵書だったのだ。円筒型のその書架は、廻すときしりながら廻る。私も廻してみた。

月僊の墓は金毘羅社の裏にあつた。八代目の住職だった。

月僊は寛保元年（一七四一）名古屋で生まれた。味噌屋丹家氏の二男。幼にして仏門に入り、早くから画才を発揮した。その後、江戸芝の増上寺に移り、いよいよ画才を伸ばした。それから京に上つて知恩院に入った。画は同時代の応挙・蕪村・大雅から影響を受けた。三十三歳のとき、知恩院の末寺である伊勢山田の寂照寺に入った。当時、寺は無住の荒寺であつた。

その寺は徳川千姫の菩提のために建てられた寺である。千姫は慶長二年（一五九七）、徳川秀忠の長女として、伏見城内に生まれた。豊臣秀吉は死に臨んで、千姫を秀頼の妻に迎えることを家康と約した。その約によって、千姫は七歳のとき、十一歳の秀頼に嫁した。

ところが、大阪落城の際、十九歳で秀頼と死別。江戸へ送られたが、本多忠政の子の忠刻ただときに嫁し、桑名城にいたので、桑名姫と呼ばれた。忠政が姫路に移されると、姫路城にいたので播磨姫と呼ばれた。

こないだ姫路へ行って姫路城をよく見た。あの城は平山城ひらやまじょうで、二つの丘の上に築かれている。東

の丘・姫山の頂に本丸、西の丘・鷲山の頂に西の丸。千姫と忠刻とはその西の丸の館に暮っていたのである。

しかし、千姫は三十歳で忠刻と死別した。

千姫は江戸の徳川家に帰ったが、寂照知鑑上人について剃髪し、天樹院と称した。天樹院は七十七歳で没した。知鑑上人が天樹院のために建てた寺が寂照寺である。

月僊はこの寺の住職となり、その画名は天下に知れ渡った。月僊は得るところの画料を寂照寺の再建、参宮道路の改修、宮川の船橋架設、その他の社会福祉に投じた。

月僊は文化六年に没した。六十九歳。

私は本堂に案内されて、月僊の描いた「万歳」「月見観音」「富士山」を見た。人物の描写がすぐれている。それから仏前の畳の上に広げられた大涅槃図を見た。私はその牛、鼠、女髪の鳥、孔雀、鶴、鴉などをよく見たが、やはり人物の描写がすぐれている。珍しいことに寝釈迦が白い腹巻を締めていた。

寺を辞して、昔の参宮道あいを間の山から小田の橋へ下り、岡本町の世義寺へ行った。寂照寺の一切経はこの寺の蔵書だった。修験道醍醐派。七月七日に護摩を焚く。成田山、秋葉山のと合せて日本三大護摩。

山田奉行所の『同心日記』（安政三年）を読んでいると、初詣でに始まり、七月七日には世義寺の

護摩を見廻ったことが書かれている。山田奉行は神宮の警備、神事の奉行、神領内の行政、司法と海上保安を掌^{つかさど}っていた。外宮に近い世義寺の護摩は山田奉行の取り締るところだったのだ。

その山田奉行所の跡が度会郡御^み蘭^{その}村の小林^{おはやし}にあることを知った。海に近いそんなところに奉行所があったのは、海上の保安を職掌としていたからである。

そこへも行って見た。史蹟山田奉行所跡という碑が立っている。広大な敷地に内館、外館があったそうだ。大湊に近いところだ。

初 伊 勢

去年の正月、志摩賢島からの帰りに、自動車で剣峠を越え、内宮の神域を通った。

磯部まで引き返し、それから西南の五ヶ所湾に出て、南勢町から北へ、剣峠を越えたのである。その山の南斜面はいちめんのシダで、明るく、風はそのシダをなびかせて通っていた。

峠から振りかえると、太平洋が遠く展^{ひら}けて、実は大観であった。

峠を越えた山の北面は鬱蒼たる森林で、道は暗い。よく見ると道のはとりの樹はみなツバキで、